

煌け! 登美北

平成27年11月2日(月)
奈良市立登美ヶ丘北中学校
生徒指導だより
文責：三間瀬 充宏

“本気で言ったことは、本気で聞かないとだめなんだ”

10月27日(火)に、文部科学省から平成26年度「問題行動調査」の集計が公表されました。「いじめ」については、小中高全体で昨年より2254件多い18万8057件が報告され、「いじめ」の問題の難しさを改めて知らされる結果となりました。

「いじめ」はみなさんに関わりが深くとても身近な問題です。そんな「いじめ」を考えるとき、私がいつも思い出すものがあります。それは重松清著の「青い鳥」という短編小説です。阿部寛が主演で映画にもなりました。その内容を少し紹介させていただきます。

「青い鳥のあらすじ」

新学期を迎えた東ヶ丘中学2年1組。前学期にこのクラスの野口という生徒が「いじめ」を苦にして事件を起こしました。マスコミに叩かれた学校側は生活指導を強化し、事件を風化させようとします。そこに村内という臨時教師が着任して来ます。担任教師がプレッシャーに負けて休職したためです。村内は極度の吃音(きつおん)で、挨拶した途端にクラスの笑い者になりますが、ある行動に出ます。転校した野口君の机と椅子を物置から教室に戻させ、そして、毎朝「野口君、おはよう」と主のいない机に向かって挨拶をします。

挨拶を欠かさない村内に、生徒や保護者、そして職員達からも抗議が殺到します。しかし、彼は挨拶を止めません。

そんな村内に園部という生徒が何かを感じていきます。彼は野口の良き理解者だったのに「いじめ」に加担してしまったのです。そのため事件以来「野口の遺した手紙に書かれた、犯人の実名3人の中の最後の1人が自分に違いない」と自分を責め続けていたのです。

そんなある日、園部は村内も参加していた生徒会で「誰かを嫌うのもいじめになるんですか」と問いかけてします。「嫌うのもいじめだ」と担当の教師が答えます。上級生はみんなからの意見を集めて話し合いを進めていこうとします。そんなみんなの姿を見て村内は、「園部君も、そしてみんなも間違っている。でも、園部君が本気で言ったことは本気で聞かないとだめなんだ」と言います。そして、「嫌うから、大勢だからいじめになるのではなく、人を踏みにじって苦しめようと思うこと、苦しめていることに気づかずに、苦しくて叫んでいる声を聞こうとしないこと」がいじめなんだと語ります。

野口君はいつも笑っていました。だから、クラスのみんなはいじめているという意識がありませんでした。村内は、みんなが野口君を、その苦しみに気づかないほど軽くしか見ておらず、野口君を踏みにじっていたと指摘します。そして、責任として忘れるなど言います。野口君のような友達とまた出会ったとき、今度はその声が聞こえるように。

今、君達は友達の声の本気で聞くことができますか、みなさんが「いじめ」を本当に解決したい、「いじめ」を受けて苦しんでいるなかまを助きたい、「いじめ」を行っているなかまに過ちを気づかせ改めさせたい、という強い思いがなければ聞くことはできないのではないのでしょうか。

「いじめ」はみなさんのところから始まります。

だから、無くしていく一番の方法はみなさんのところだと思います。

